多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校 NEWS 2026年 5月

1. 吹奏楽部　第32回　定期演奏会　4/29(水)@パルテノン多摩大ホール

日ごろの練習の成果を発揮し、心を込めて演奏できました。多彩な内容のステージを披露することもできたと思います。皆さまから温かい拍手やお言葉をいただき、部員たちにとって大きな励みとなりました。ご来場いただきました多くの皆さま・応援いただきました皆さまに感謝申し上げます。







2. 体育祭　5/13(水)@京王アリーナ TOKYO

今年度も昨年に引き続き、体育館で体育祭を行いました。熱中症や雨の心配もなく、快適な環境です。













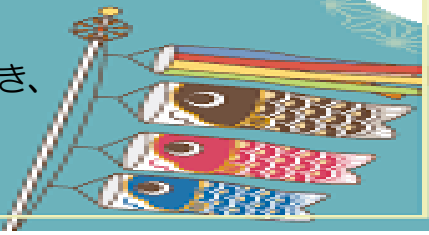

教員種目の玉入れ
勝負にこだわり
全員本気モード!!
勝利チームは…青組

最終結果は…

何年ぶり？？？
白組の優勝!!でした




朝日新聞の『青春スクロール』という記事で、5/14(木)から毎週木曜日に、本校が取り上げられました。初回は、本校の４期生卒業生の 隠岐さや香さんでした。この後もダンスドリル部や教職員、卒業生の話題が４週にわたって記事になります。ぜひご覧になっていただき、昔を懐かしみながら学校の今と比較してみてください。



3.　教育実習　5/25(月)～6/13(土)

今年度は、卒業生 33 期生を中心に５名の大学生が教育実習にやってきます。若さを活かして一生懸命取り組んでください。



【在籍大学】	【教科･科目】
鹿児島大学	理科(生物)
日本大学	理科(生物)
日本体育大学	保健体育
日本体育大学	養　　護
多摩大学	情　　報

4．交通安全・防犯教室　5/16(土)　対象：中学１・２年生

自転車の運転に関する法律が改定されたので、警察の方をお招きして講習会を開きました。事故に巻き込まれないために、安全運転に心がけましょう！









5．芸術鑑賞会　5/27(水)@パルテノン多摩大ホール

今年度の芸術鑑賞会は、９年ぶりとなる“日本フィルハーモニー交響楽団“によるオーケストラ演奏を鑑賞しました。プログラム最初の『学園歌』では、吹奏楽部も共演させていただきました。吹奏楽部の生徒たちと一緒に奏でる『学園歌』は素晴らしいものでした。残念ながら、上演中の撮影は禁止でしたが、その他の演奏もすべて素晴らしく、本物のオーケストラの演奏に感動しました！



JAPAN
PHILHARMONIC
ORCHESTRA



2026年度芸術鑑賞会

オーケストラコンサート

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団　指揮：喜古恵理香

◆出　演◆

指揮　喜古恵理香　Erika Kiko



©T.Tairadete

東京音楽大学音楽学部作曲指揮専攻（指揮）及び同大学大学院指揮研究領域に学び、これまでに指揮を広上淳一、汐澤安彦、下野竜也、田代誠文、三河正典の各氏に師事。
在学中、オーケストラ・アンサンブル金沢主催の井上道義氏による指揮者講習会にて優秀者に選出され、同講習会のリレーコンサートに出演。2017年からNHK交響楽団よりパーヴォ・ヤルヴィ氏のアシスタントに任命され、２年間アシスタントコンダクターを務めた。また2016年から４年間、京都市ジュニアオーケストラの活動に指揮者として携わる。これまでに東京交響楽団、東京都交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団、京都市交響楽団、名古屋フィルハーモニー管弦楽団、広島交響楽団、九州交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、山形交響楽団、札幌交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢等と共演を重ね、今後も全国各地のオーケストラと共演予定。
オペラの分野ではNISSAY OPERA「アイナダマール」の日本初演に携わったことをきっかけに、同「ドン・ジョヴァンニ」「コジ・ファン・トゥッテ」「ラ・ボエーム」「カプレーティ家とモンテッキ家」、藤原歌劇団「蝶々夫人」、二期会「フィデリオ」、新国立劇場「魔笛」「アルマゲドンの夢」、びわ湖ホール「薔薇の騎士」など多数公演において副指揮者を務める他、びわ湖ホール「泣いた赤鬼」ではびわ湖ホール声楽アンサンブルと共演、好評を博した。第10回アカレスト国際指揮者コンクールセミファイナリスト。2022年、広島で行われた次世代指揮者コンクールにて第３位入賞、同時に聴衆賞、オーケストラ賞受賞。

管弦楽　日本フィルハーモニー交響楽団

1956年６月創立。2026年には創設70周年を迎える。楽団創設の中心となった渡邉暁雄が初代指揮者を務め、創立当初より幅広いレパートリーと斬新な演奏スタイルで、ドイツ・オーストリア系を中心としていた当時の楽壇に新風を吹き込み、大きなセンセーションを巻き起こした。2023年９月よりカーチュン・ウォンが首席指揮者を務め、その独創性と真摯さに裏付けられた音楽作りが注目されている。近年の高い演奏力と積極的なプログラミングは「21世紀の日本のオーケストラが目指すべき方向を明確に示す」と評価され、ミュージックペンクラブ音楽賞を受賞した。桂冠名誉指揮者小林研一郎、桂冠指揮者兼芸術顧問アレクサンドル・ラザレフ、フレンド・オブ・JPO/芸術顧問広上淳一という指揮者陣を中心に年間150回を超えるオーケストラ公演を行っている。移動公演型を本拠地とし、芸術性と社会性を両輪に、「温かさ」「人に寄り添う」土壌を大切にしながら、あらゆる人々へ、世代へ、地域へ、世界へ、音楽の持つ様々な力を社会に活かしていくことを目指している。
オフィシャル・ウェブサイト https://japanphilor.jp
X(旧Twitter)@Japanphil Instagram @japanphil.official



©飯田耕司

◆プログラム◆

阿久悠・三木たかし/学園歌「この輝ける日々よ」

ベートーヴェン　/ 交響曲第５番 ハ短調 作品67《運命》第１楽章

チャイコフスキー / 弦楽セレナーデ ハ長調 作品48　第２楽章「ワルツ」

メンデルスゾーン / 劇音楽《真夏の夜の夢》より「結婚行進曲」

シベリウス　　/ 交響詩《フィンランディア》作品26

～休憩　20分～

ドヴォルザーク　/　交響曲第９番 ホ短調 作品95《新世界より》

開催日時　2026年5月27日（水）
開場13：30　開演14：00
会　場　パルテノン多摩大ホール（「多摩センター駅」より徒歩５分）
集　合　13：45会場（座席）で出欠確認
※欠席の場合は、1300までに欠席メールを送ること。
解　散　16：15頃 現地解散
服　装　夏服正装　（ポロシャツ、ショートソックスは不可。寒い場合はセーターを持参する。）
座　席　自分の座席を記入しよう　＿＿列＿＿番

◆鑑賞マナー◆　みんなで気持ちよく音楽を楽しもう

- スマートフォンなどの電源はOFFに！
- 写真・動画の撮影、録音は禁止です。
- 公演中の「入退場」はできません。開演前、休憩時にトイレをすませましょう。
- 客席内での「飲食」「おしゃべり」「立ち歩き」は禁止です。
- 交響曲≪新世界≫は第４楽章が終わってから拍手をしましょう！（楽章間ではしません）

◆解説◆

学園歌「この輝ける日々よ」
作詞家　阿久悠・作曲家　三木たかしは、石川さゆりの「津軽海峡・冬景色」をはじめ、昭和に多くのヒット曲を生み出した名コンビです。
学園歌は、この二人によって昭和63年の開校時に作られました。

メンデルスゾーン（1809-1847）
劇音楽《真夏の夜の夢》より「結婚行進曲」



結婚式といえばこの曲！というほど定番ですが、最初からそうだったわけではありません。「結婚行進曲」は、シェイクスピアの劇曲≪真夏の夜の夢≫のために1842年に作られました。その後、1858年にイギリスのヴィクトリア王女の結婚式で演奏され一気にポピュラーになりました。作曲者はフェリックス・メンデルスゾーン。19世紀のドイツで活躍した作曲家です。1809年に生まれ、子どものころから音楽の才能にあふれ、「神童」と呼ばれていました。わずか38歳でこくなりましたが、多くの名曲を残しました。ピアノ演奏も得意で、指揮者としても有名でした。メンデルスゾーンは、バッハ復活の立役者でもあります。今では「音楽の父」と言われているヨハン・ゼバスティアン・バッハですが、当時は世の中から忘れられていました。しかし20歳のメンデルスゾーンがバッハの素晴らしさに注目し、《マタイ受難曲》を復活上演。これがきっかけとなってバッハが再評価されるようになりました。

シベリウス（1865-1957）　交響詩《フィンランディア》作品26



ジャン・シベリウスは、19~20世紀に活躍したフィンランドの作曲家です。当時のフィンランドは、ロシア帝国の支配下にありました。19世紀末になると、ロシアによる言論統制や政治的圧力が強まり、フィンランドの人々の間で民族意識が高まっていきます。そのような時代背景の中で作曲されたのが、この『フィンランディア』です。
1899年に発表された交響詩で、ロシアへ直接的な批判はできなかったため、音楽によってフィンランド人の愛国心や自由への願いを表現したのです。曲の冒頭は、重く緊張感のある響きによって抑圧された社会の雰囲気が描かれ、中間部ではフィンランドの人々の苦悩や葛藤が表現されます。後半には穏やかで壮麗な旋律が現れ、人々の希望・祈り・静かな誇りを感じさせます。この部分は後に歌詞がつけられ「フィンランディア賛歌」として歌われ、第２の国歌と言われています。
シベリウスは「フィンランドの国民的作曲家」として象徴的存在です。



チャイコフスキー(1840-1893)
弦楽セレナーデ ハ長調 作品48
第２楽章「ワルツ」



ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーは、ロシアのヴォトキンスク出身で、バレエ音楽の「白鳥の湖」「くるみ割り人形」などで知られるロマン派の作曲家です。弦楽セレナーデは、チャイコフスキー40歳ごろの作品で、弦楽器のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスだけで演奏されます。本人もこの曲をとても気に入っていて、「心からの興奮で書いた作品だ」と語っています。第２楽章は緩やかで優雅な３拍子のワルツで、単独で演奏されることも多く、親しみやすい曲です。

ベートーヴェン（1770-1827）
交響曲第５番 ハ短調 作品67《運命》第１楽章



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは、ドイツのボンで生まれた古典派の作曲家です。次の時代ロマン派への橋渡しをした存在とも言われています。４歳頃からテノール歌手だった父に音楽教育を受け、７歳の時にデビュー演奏をしました。青年時代からはオーストリアのウィーンでピアニストや作曲家として活躍しました。20代後半から聴力を失い始めますが、「喜びの歌」で知られる交響曲第９番をはじめ、数多くの優れた曲を残しています。この曲は1808年、ベートーヴェン37歳の時に書き上げられました。第１楽章は有名な『ジャジャジャジャーン』という緊張感のある動機で始まり、これが曲を通して繰り返し登場します。この動機についてベートーヴェン自身が「このように運命が戸をたたく」と語ったと伝えられていることから、日本では《運命》の名で親しまれています。

ドヴォルザーク（1841-1904）　交響曲第９番 ホ短調 作品95《新世界より》



アントニン・ドヴォルザークは、19世紀のチェコ出身の作曲家で、民俗音楽の要素を取り入れた親しみやすい音楽で知られています。彼の代表作のひとつが、交響曲第９番《新世界より》です。ニューヨークにあるナショナル音楽院の院長として招かれ、アメリカに滞在していた1893年に作曲されました。当時、ヨーロッパの人々はアメリカを「新世界」と呼んでいました。ドヴォルザークは、特にアフリカ系アメリカ人のスピリチュアル（霊歌）や、アメリカ先住民の音楽のリズムに注目しました。この交響曲は４つの楽章で構成されており、特に第２楽章はアメリカ先住民の「ハイアワサの歌」に影響を受けて作曲され、主題は「家路」あるいは「遠き山に日は落ちて」のメロディとして広く知られています。
ドヴォルザークは大作曲家でありながら、とても庶民的な人物でした。たいへんな鉄道マニアで、暇さえあれば駅に出かけ、時刻表や列車の車両番号を覚えるほどでした。また場を賑うのが好きだったという話もあります。